

	7/4(木)	7/5(金)	7/6(土)	7/7(日)	7/8(月)	7/9(火)	7/10(水)
10							
11		『アジア三面鏡2016: リフレクションズ』 10:00 -	『ダイ・トゥモロー』 10:00 -	『十年 Ten Years Thailand』 10:30 -		7/3(水) 16:00 - シンポジウム:東京芸術劇場	
12							
13	『一緒にいて』 12:00 -						
14		『アルファ、殺しの権利』 13:15 -	『ミー・ボック・マン [デジタルリストア版] / 痛み』 12:25 -	『飼育』 13:10 -			
15							
16	『ミー・ボック・マン [デジタルリストア版] / 痛み』 14:45 -						
17		『見えるもの、 見えざるもの』 16:20 -	『一緒にいて』 15:55 -	『見えるもの、 見えざるもの』 15:40 -			
18							
19							
20	『メモリーズ・オブ・ マイ・ボディ』 18:30 -	『ダイ・トゥモロー』 19:10 -	『アルファ、殺しの権利』 18:50 -	『メモリーズ・オブ・ マイ・ボディ』 18:40 -	『十年 Ten Years Thailand』 19:00 -	『飼育』 19:00 -	『アジア三面鏡2018: Journey』 19:00 -
21							

★7/4『メモリーズ・オブ・マイ・ボディ』の上映前にゲスト登壇のオープニングセレモニーを予定

6月8日(土)より **O-チケ** にて発売! U-25/シニア割引前売500円!

購入方法	インターネットから予約 https://l-tike.com/ 1枚につきシステム利用料216円、発券手数料108円の手数料がかかります。
	ローソン・ミニストップにあるLoppi 端末にて購入 ※下記MAP、ローチケHIBIYA TICKET BOXでもお買い求めいただけます。 ※1枚につき発券手数料108円の手数料がかかります。
	電話予約 0570-084-003 (自動音声) 1枚につきシステム利用料216円、発券手数料108円の手数料がかかります。




<https://l-tike.com/>
 ご利用ガイドURL: <https://l-tike.com/guide/>



『サタンジャワ』サイレント映画 + 立体音響コンサート インドネシア映画界を牽引するガリン・ヌグロホと森永泰弘、水曜日のカンパネラのコムアイが、映画と音響と声で、未体験のアート空間を創りあげます。 日時 2019年7月2日(火) 14:00 開演 / 19:00 開演 (2回公演、各回30分前開場) 会場 有楽町朝日ホール チケット発売中!	『東南アジア映画ガイドブック(仮題)』発売決定! 全上映作品の解説や監督の作家論に加え、上映作品以外の東南アジアの代表的監督の解説も含む、「現代東南アジア映画がわかる」ガイドブックの決定版! 本特集の公式カタログとしても必携。 販売場所 「東南アジア映画の巨匠たち」上映会場、 「響きあうアジア 2019」(6月下旬より@東京)の一部公演にて先行販売。 その後、書店・Amazonにて販売予定。
--	--

詳細は「響きあうアジア2019」公式サイトをご確認ください。 <https://asia2019.jfac.jp/>

＜一般お問い合わせ＞ 国際交流基金アジアセンター 文化事業第1チーム 03-5369-6140 (平日10:00-18:00) jfac_film@jpf.go.jp
 ＜チケットに関するお問い合わせ＞ 0570-000-777 (受付時間:10:00~20:00) 自動音声の後オペレーターにおたがします。

ワールドクラスの巨匠監督が集結!
今観るべき東南アジアの特選映画



ASIA IN RESONANCE
響きあうアジア 2019

東南アジアの
映画巨匠たち

7/3 - 7/10
Wed Wed

有楽町スバル座
東京芸術劇場

主催:国際交流基金アジアセンター 共催:公益財団法人ユニジャパン



U-25/シニア割引
前売り500円!

<https://asia2019.jfac.jp/>

Cinema

2019年、設立6年目を迎える国際交流基金アジアセンターは、これまでの日本と東南アジアの文化交流事業の集大成として、「響きあうアジア2019」を実施します。その一環として、躍進目覚ましい東南アジア映画をこれまで様々な形で紹介してきた東京国際映画祭と共に、スペシャルプログラムをお届けします！

〈東南アジアの巨匠たち〉 世界に衝撃を与えた監督たちの原点から最新作まで



ガリン・ヌグロホ監督

1961年、インドネシア生まれ。90年代インドネシア映画新世代のバイオニアとしてその名が知られる。監督作はカンヌ、ヴェネチア、ベルリンをはじめとする数多くの映画祭で上映され、多数の映画賞に輝いた。映画以外にも演劇や美術インスタレーションも手がけるほか、2005年にはジョグジャNETPACアジア映画祭を創設した。

Photo: 佐藤基



ブリランテ・メンドーサ監督

1960年、フィリピン生まれ。監督第1作『マニラ・デイドリーム』で05年ロカルノ国際映画祭ビデオ部門金豹賞を受賞。その後数々の国際映画祭で評価される。最もよく知られている受賞は、09年に『キナタイ マニラ・アンダーグラウンド』でカンヌ映画祭監督賞の栄冠に輝いたことだ。近年、フランス政府より芸術文化勲章シュヴァリエを授与された。



アピチャッポン・ウィーラセタクン監督

1970年、タイ生まれ。映画監督、プロデューサー、アーティスト。監督作は『ブンミおじさんの森』(10)など。タイ内外で実験的でハイブリッドな物語映画を活発に製作。カンヌ国際映画祭パルムドールの他、最近ではオランダのプリンス・クラウス・アワードを受賞している。『響きあうアジア2019』では舞台作品『フィバー・ルーム』を上演。



メモリーズ・オブ・マイ・ボディ

Memories of My Body

ジャパンプレミア

2018/インドネシア/106分

監督:ガリン・ヌグロホ

出演:ムハَمَّد・カン、ラディティア・エファンドラ、リアント

©Asian Shadows International Sales Limited

『サタンジャワ』に加えてヌグロホ監督の最新作を日本初公開。中部ジャワのレンゲル(女装した男性が踊る女形舞踊)のダンサーを主人公に、地域の芸能に根付くLGBTQの伝統が見てとれる。『ひとつの身体の中に混在する男性性と女性性を描いています』(監督)。ヴェネチア国際映画祭出品。



アルファ、殺しの権利

Alpha, The Right to Kill

2018/フィリピン/94分

監督:ブリランテ・メンドーサ

出演:アレン・ディゾン、エライジャ・フィラモ、パロン・ガイスラー

協力:東京フィルメックス

メンドーサ監督が「ローサは密告された」に続いて発表した、フィリピン麻薬戦争を一人の警察官の視点から生々しく切り取る問題作。警察署が麻薬組織にスパイを送り込み、善と悪、表と裏が入り乱れる戦いが展開していく。サンセバスチャン国際映画祭で審査員特別賞を受賞。



アジア三面鏡2016:リフレクションズ

Asian Three-Fold Mirror 2016: Reflections

2016/日本/118分

監督:ブリランテ・メンドーサ、行定勲、ソト・クォーリーカー

出演:ルー・ヴェローソ、津川雅彦、ジャリファ・アマニ、永瀬正敏、加藤雅也

製作:国際交流基金アジアセンター/ユニジャパン(東京国際映画祭)

©2016 The Japan Foundation, All Rights Reserved.

国際交流基金アジアセンターと東京国際映画祭が共同製作したオムニバス映画シリーズ第1弾。メンドーサ監督は第1話「SHINIUMA Dead Horse」で不法滞在のフィリピン人を主人公に、酷寒の北海道から灼熱のフィリピンへ強制送還の旅路を描く。迫真の臨場感ほまさにメンドーサ・マジック！他に行定勲監督「鳩 Pigeon」、ソト・クォーリーカー監督「Beyond The Bridge」。第29回東京国際映画祭上映作品



十年 Ten Years Thailand

Ten Years Thailand

2017/タイ、香港、日本/93分

監督:アーティット・アッサラット、ウィシット・サーサナティアン、

チュラヤーンノン・シリボン、アピチャッポン・ウィーラセタクン

出演:ブンヤリット・ウィアンノン、キダカーン・チャットゲーオマニ、

タナサワン・テープサトーン

香港・日本・台湾と並んで製作された、10年後の自国を描く近未来オムニバスの国際共同プロジェクトのタイ版。アピチャッポンは第4話「Song of the City」で銅像の建つ公園とそこに集う人々を素描。他にアーティット・アッサラット「Sunset」、ウィシット・サーサナティアン「Catopia」、チュラヤーンノン・シリボン「Planetarium」。第31回東京国際映画祭上映作品

香港・日本・台湾と並んで製作された、10年後の自国を描く近未来オムニバスの国際共同プロジェクトのタイ版。アピチャッポンは第4話「Song of the City」で銅像の建つ公園とそこに集う人々を素描。他にアーティット・アッサラット「Sunset」、ウィシット・サーサナティアン「Catopia」、チュラヤーンノン・シリボン「Planetarium」。第31回東京国際映画祭上映作品

いま映画分野で求められる国際的な人材とは？ またその先にある国際協働の可能性とは？ 第一部では次世代育成のケーススタディと共に考え、第二部では日本との交流にも縁深い東南アジアの巨匠3名をお招きし、これまでの国際共同制作の経験を通しての今後の展望について意見を交わします。

会場:東京芸術劇場ギャラリー1 (東京都豊島区西池袋1-8-1 5F)
入場無料、要事前申込(定員:各回100名)
申込・詳細:「響きあうアジア2019」公式サイトをご確認下さい。
【6/26(水)受付締切】

Masters of Southeast Asian Cinema



来日予定

エリック・クー監督

1965年、シンガポール生まれ。数々の国際映画祭で出品を果たしたシンガポールを代表する映画監督。08年、『私のマジック』(TIFF08出品作)でカンヌ映画祭コンペティション部門に選出。11年『TATSUMI マンガに革命を起こした男』ではカンヌ映画祭ある視点部門出品、アカデミー賞外国語映画賞シンガポール代表に選出。最新作は『家族のレシピ』(18)。



リティ・パン監督

Photo: ©DR Richard Dumas

リティ・パン監督

1964年、カンボジア生まれ。カンヌ映画祭ある視点部門グランプリ受賞作『消えた画 クメール・ルージュの真実』(13)等、ドキュメンタリー映画を中心に高い評価を受けている。映画製作の傍ら、カンボジアの視聴覚資料を収集・公開するリソースセンターや、フィルム・コミッションを設立し、カンボジアの映像分野の牽引役として活動している。



来日予定

ナワポン・タムロンラタナリット監督

1984年、タイ生まれ。インディペンデント、商業映画の両方で脚本家として活動した後、監督としてデビューした。ユニークでエキセントリックなスタイルは高い評価を得て、国内外の映画賞を多数受賞している。昨年の東京国際映画祭ではBNK48のドキュメンタリー『BNK48: Girls Don't Cry!』が上映された。



エドウィン監督

1978年、インドネシア生まれ。短編『Kara, The Daughter of A Tree』(05)はインドネシア初のカンヌ映画祭監督週間上映作品。『動物園からのポストカード』(12)はベルリン映画祭コンペティション部門入選。最新作『アルナとその好物』(18)は、ベルリン国際映画祭のCulinary部門にて上映。



1 ミーポック・マン

2 痛み

Mee Pok Man [Digitally Restored Version] / Pain

11 [デジタルリストア版] ジャパンプレミア

11995/シンガポール/110分 21994/シンガポール/32分

監督:エリック・クー

出演:11 ジョー・ン、ミシェル・ゴ、リム・ケイトン 2 ナシル・フセイン、ダレン・リム

斎藤工・松田聖子共演の『家族のレシピ』が公開されたクー監督、伝説の長編デビュー作『ミーポック・マン』をAsian Film Archiveによるデジタルリストア版で上映！ミーポック(麺料理)売りの青年と娼婦の愛を描き、シンガポール映画の復興を告げた記念碑的作品。ローカルフードへのこだわりは現在まで一貫。本国で上映禁止となった初期の短篇『痛み』を併映。



一緒にいて

Be With Me

2005/シンガポール/93分

監督:エリック・クー

出演:チョウ・サンチン、テレサ・チャン、シー・カンヨウ

©Zhao Wei Films

妻を亡くした店主、グルメな警備員、同性に恋する女子高生という3人の孤独を静謐でスタイリッシュな様式のなかに優しく見つめたクー監督の初期の代表作。シンガポール映画として初めてカンヌ映画祭監督週間のオープニングを飾った。第18回東京国際映画祭上映作品



飼育

Shiku

2011/カンボジア/93分

監督:リティ・パン

出演:シリル・ゲイ、チュム・チュオブ、スアム・チュアム

『消えた画 クメール・ルージュの真実』などで知られるドキュメンタリーの巨匠リティ・パンが、大江健三郎の芥川賞受賞作『飼育』を1972年のカンボジアの物語に翻案して劇映画化。クメール・ルージュの少年兵が墜落した米軍機の黒人パイロットを鎖につないで"飼う"グロテスクな寓話。大島渚監督版『飼育』との比較も一興。第24回東京国際映画祭上映作品

〈東南アジア次世代の巨匠たち〉これから世界を揺るがす若き才能たち



来日予定

カミラ・アンディニ監督

1986年、ガリン・ヌグロホ監督の長女としてジャカルタに生まれる。オーストラリア留学を経て、『鏡は嘘をつかない』(11)で監督デビュー。東京国際映画祭でTOYOTA Earth Grand Prixを受賞するなど国際的に高い評価を得る。第2作『見えるもの、見えざるもの』(17)で東京フィルメックス最優秀作品賞を受賞。



来日予定

ナワポン・タムロンラタナリット監督

1984年、タイ生まれ。インディペンデント、商業映画の両方で脚本家として活動した後、監督としてデビューした。ユニークでエキセントリックなスタイルは高い評価を得て、国内外の映画賞を多数受賞している。昨年の東京国際映画祭ではBNK48のドキュメンタリー『BNK48: Girls Don't Cry!』が上映された。



見えるもの、見えざるもの

The Seen and Unseen

2017/インドネシア・オランダ・オーストラリア・カタール/86分

監督:カミラ・アンディニ

出演:ニコデク・タリ・ティティ・カシー、

イダバグス・プトゥ・ラディティア・マヒジャセナ、アユ・ラクスミ

協力:東京フィルメックス

国際的に高く評価されるインドネシアの若手女性監督アンディニの、『鏡は嘘をつかない』に続く第2作。脳障害で寝たきりの弟を看病する10歳の少女タントリの心は真夜中に解放される。現実と幻想の入り交じった描写が美しい。東京フィルメックスで最優秀作品賞を受賞。



ダイ・トゥモロー

Die Tomorrow

東京初上映

2017/タイ/75分

監督:ナワポン・タムロンラタナリット監督

出演:サニースワンメーターン、パッチャー・ブーンピリヤ、シラート・インタラチャート

協力:大阪アジア映画祭

『マリリー・イズ・ハッピー』など新世代タイ映画の旗手ナワポン監督が「死」について思いを巡らすドキュードラマ。「人生の最後の1日は、ごくごく普通の1日でありがち」(監督)という認識のもと、普通の人が最後の一日を過ごすドラマ部分と、人々が死について語るインタビュー部分が構成されている。



アジア三面鏡2018:Journey

Asian Three-Fold Mirror 2018: Journey

2018/日本/83分

監督:デクナー、松永大司、エドウィン

出演:長谷川博己、ニコラス・サブットウラ、チェン・ジン

製作:国際交流基金アジアセンター/ユニジャパン(東京国際映画祭)

©2018 The Japan Foundation, All Rights Reseved.

「アジア三面鏡」シリーズ第2弾は若手監督3人の競作。エドウィン監督の第3話「第三の変数」では、倦怠気味の夫婦が東京旅行で謎の男と出会い、関係に変化が生じていく。ジュールなエドウィン・ワールド全開！他にデグナー監督「海」、松永大司監督「碧土」。第31回東京国際映画祭上映作品。

Talk&Lecture

7/8『十年 Ten Years Thailand』上映後

徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)、福島真人(文化人類学者/東京大学教授)

7/9『飼育』上映後

『飼育』はどのようにカンボジアに翻案されたのか？

講師:福富友子(東京外国語大学非常勤講師)

7/10『アジア三面鏡2018:Journey』上映後

東南アジア映画の魅力とは？

ゲスト:市山尚三(東京フィルメックス・ディレクター)、松下由美(映画プレゼンター)

Symposium 映画分野における日本と東南アジアの国際展開を考える

共催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

I:映画分野における次世代グローバル人材育成について

日時:7月3日(水)16:00~(15:40開場)

登壇者:市山尚三(映画プロデューサー)、藤岡朝子(山形国際ドキュメンタリー映画祭理事)

安岡卓治(映画プロデューサー・日本映画大学教授) ※敬称略、五十音順

モデレータ:池田高明(NHKエンタープライズ/タレント・トーキー選考委員)

II:映画制作におけるコラボレーションの未来図

日時:7月3日(水)18:00~

登壇者:エリック・クー、ガリン・ヌグロホ、ブリランテ・メンドーサ ほか

モデレータ:石坂健治(東京国際映画祭プログラミング・ディレクター)